

私の工夫

評価に関する研究から 授業改善へ

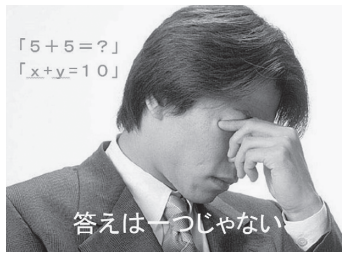
県立岡山東商業高等学校

指導教諭 笠木 秀樹



1 はじめに

「答えは一つじゃない」。初めての授業では、必ずこのようなスライドとともに生徒に問いかける。



実社会には正解はなく、多面的な観点から問題を眺め様々な情報や証拠を用いた高度な判断をして、一番効率のいい最適な解答を判断して出す必要がある。つまり、解答のないところから解答を自ら導き出すとともに、何もないところから新しいものを創造するような能力を育成することが求められることを力説している。

しかし、生徒の現状を考えると、落ち着いてはいるが、自分の考えを自信を持って表現することや自主的に物事に取り組むことを苦手とする生徒が年々増えているように感じる。そこで、知識の定着を図り、言語活動を思考力、判断力、表現力をよくくむ活動として捉え、グループによる小集団づくりの要素を含めICTを活用した授業実践を進めてきた。

2 学習評価の工夫改善

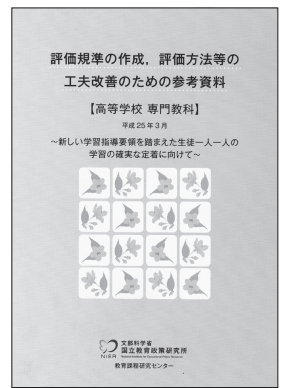
平成24年11月に、国立教育政策研究所教育課程研究センターより「評価規準の作成、評価方法等の工夫改善のための参考資料」がまとめられた。これは、内容のまとめりごとの評価規準及びその具体例、単元の評価に関する事例、観点別評価の総括及び評定への総括についての考え方を調査研究協力者として携わったこれまでの授業実践とおした「指導と評価の計画」および評価規準を

作成した。その主なポイントは次のとおりである。

- 具体的な事例を取り上げ、考えや討論を行う。
 - グループなどでの活動を通して実践的な力や協調性をはぐくむ。
 - 経済社会や実務に目を向けさせる事例を取り入れる。
 - 創造的な活動を行う。
- また、指導と評価の計画を立てるに当たっては、その授業でどんな力を育成するかを明確にする必要がある。育成する力が明確になると、それを実現するための指導計画が決まる。育成する力が明確になると、それに対して評価の観点が決まるからだ。

そこで私は、生徒自ら考え、様々な意見を聞きながら自分の考えをまとめ、適切に行動できたり、表現できたりする力を育成するというめざすべき力を明確にし、具体的に、「自分の考えを持って、自分の言葉で発言できる」という生徒像をもとに授業実践を進めている。

しかし、現実には考查を中心としていわゆる平常点を加味した成績付けのための評価にとどまっているこ



とも指摘されており、観点別学習状況の評価を踏まえた学習評価を行い、授業の改善につなげるよう努力している。

3 討論を中心とした授業展開

特に教科商業では、コミュニケーション能力やビジネスの諸活動を行う上で必要となるのが思考力・判断力・表現力などであることから、経済社会の具体的な事例を取り上げたディスカッションやディベートなど、授業の様々な場面において言語活動を取り入れている。

例えば、新聞や放送、インターネットなどを活用することによって日ごろから経済に興味・関心をもたせ



経済社会の動向に注目させている。新聞記事を教材として用いることも多く、身近な話題から経済を学び、経済社会の動向に着目させ、経済現象を主体的に理解し深化させることができる。考えをまとめるためのワークシートを開発するとともに、教室の配置にも写真(34ページ最下段)のように討論しやすい工夫をしている。

4 グループによる授業展開

グループによる学習は、企業でも小集団を組み、職場や業務の改善に取り組んでいる事例も多いことから、ビジネスの場面を想定した指導としても活用できる。次のポイントをと

○一つのテーマに対して自由な発想で意見を出し合い、意見交換を行える環境づくり。

○主体的に問題解決に取り組むための環境づくり。

○問題解決の過程における行動の観察や振りかえりの重視。

グループによる学習では、ワークシート(自作教材)の開発に心掛けている。その一例を紹介する。

その一つがケース教材による授業展開である。企業の事例をケースとして取り扱うので、実践的に学習するなかで、課題の発見や適切な行動が期待でき、討論の中で生徒の能力を引き出し、多様な視点を学ぶことができる。つまり、具体的なビジネスと結びついた知識、ビジネスの諸活動に取り組む創造的な能力と実践的な態度が育成されると考えられる。



「商品開発」における題材では、「商品開発の方針とテーマの決定」で、ポテトチップスの新製品の開発事例を使ってヒットした製品について取り

上げたケース教材がある。既存の商品と新商品を考察し、示された課題である新製品のターゲットを比較、検討して、誰をターゲットにするかという製品開発の方針決定について考えさせるものである。

また、ジグソー法による授業展開は、メンバーが互いに、自分しか知らない情報を持っており、全員が協力して初めて全体像が見え、グループで話し合うことを自然に引き起こしうる構造であり、優れた協調学習の一つと考えられる。

「ビジネス基礎」における題材では、グループのメンバーが、それぞれ、「流通機構の近代化」、「小売業の移り変わり」、「現代市場の特徴的な要素」ということを学習し、「ビジネスの目的」を実現するために必要なことは何かを考え、教え合うことによって、「小売業におけるマーケティング」について理解できるという構造である。

5 成果と課題

このようなスタイルの授業で生徒はどう変わったか。「学習で身に付いたもの(10項目)」調査の結果、講義式の授業に比べて、有意に向上していることを示した。学習後は学習前に比べて、グループによる学習集団では、「発表する」、「話し合う」、「意見を述べる」、「論理的に考える」の4項目に有意な差がみられた。また、討論による学習集団では、「意

見を聞く」、「意見を述べる」、「話し合う」、「探究する」、「まとめる」、「討論する」の6項目に有意な差がみられた。

このことは、なにより多くの生徒が思考力・判断力・表現力の向上を実感できたことにも表れている。「自分の考えをまとめ述べることができた」という満足感や自信をもたらすと同時に「論理的に考える」、「探究する」という思考力の育成につながった。また、主体的な関わりや意欲の向上という観点からも効果的であったと考えられる。

6 おわりに

思考力・判断力・表現力をはぐくむ授業によって、生徒が自ら考え、人にわかるように説明したり、生徒同士で考えを共有し深め合ったりすることで、教科の内容に対する理解が深まり、興味・関心を高める。その結果、教科目標に近づくと考えられる。そして、なにより、生徒にどのような力を身に付けさせたいかが明確になると、より焦点を絞った指導が可能になってきた。

今後はさらに授業改善に向けて考察や討論の質を高め、指導を充実させ、「チョーク&トークの授業」からの脱却をめざして、生徒自身が主体的に学ぶ授業をすすめると共に、さまざまな働きかけの中で生徒を育てていきたい。